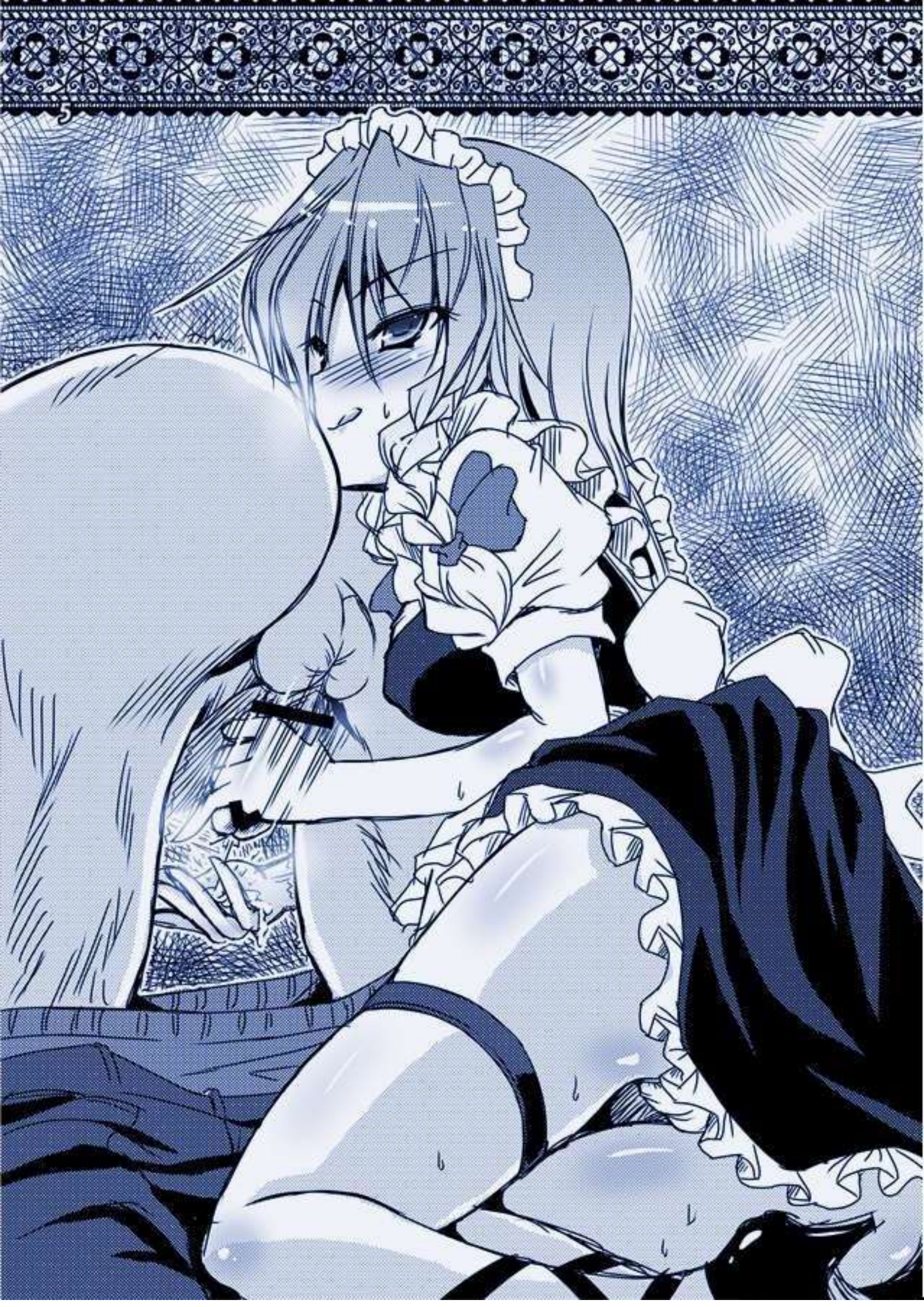
オマケムケ
コウウマカン
成人指定
ReverseNoise 2014 Summer

様々な調度品が並べられた寝室の中
よく似た二つの幼い嬌声と男のうめき声が上がっていた。
「ほら、私が動いてあげてるんだから、貴方も合わせなさい」
その小さな身体には不釣合いなほどの剛柱を咥え込んで
レミリアは軽くのけぞりながら、その肢体を揺らしている。
キツく、しかし柔らかく絡み付き締め付けてくる秘肉から伝わる快感に
男は思わず声を上げそうになる……が、それも口元に当てられた薄桃色の唇唇に遮られる。
「うふふ……❤　お姉様とシている間、私の方はしっかり舐めていてね、お兄様❤」
先ほどまで男のペニスが挿入れられていた秘裂からは
自らたっぷりと注ぎ込んだザーメンが止め処なく溢れ出している。
「お兄様が自分でしゃせーしたせーえき……返してあげれば、また射精してもらえるかな❤」
秘所に当たる鼻息を感じ昂揚した口調で囁りながら、フランドールは尻の下にある顔を見下ろした。
「フラン、そんな事をしなくてもこの男は私たち二人を相手にしたら、いくらでも勃起して腰を振るわよ♪」
「そうね、お姉様。お兄様ってば生粋のろりこんだものね♪」
そんな会話を続けている間にも、姉の方の顔からは余裕が消え息使いも荒くなってくる。
「ん……っ❤　んはぁっ❤　いっいいわよ……別にそろそろイってもっ❤」
レミリアの腰の動きは次第に速さを増して行く……
そろそろ限界なのか短いストロークで膣内のペニスを最奥に押し付けおねだりをする
しかし、たとえその欲求を一時的に満たしても次は妹……さらにまた……宴は終わりそうにない……



「ん……ふぅ。ヒクヒクしてるわよ。そんなにコレがいいの？」
少しからかう様に囁いて、咲夜は再び男の菊座に舌を這わせた。男は一瞬ビクリと下半身の筋肉を強張らせる。
その動きは咲夜に握られたペニスにも伝わり、脈動する度に、より一層硬度を増していく。
「クスクス……お尻の穴を舐められながらこんなにガチガチにしちゃって❤　カリも凄く張ってる……」
そう言って咲夜は、四つん這いにさせた男の背後から腕を回し
まるで牛の乳搾りでもするかの様にその肉竿を握る。直接的な刺激を受け、男のペニスはさらに大きく膨張していった。
「ほら、シコシコして欲しかったら、もっと腰を高く突き出しなさい♪」
必死に懇願してくる下半身に、咲夜は愉悦の表情で応える。
すでに先走り汁でヌルヌルになった亀頭にその細い指を絡めしごきながら尻穴の奥に窄めた舌を挿し入れる。
快楽に震く中の器を舐め上げながらも、猛茎を握るその手は休まないどころかさらに動きを速めて行った。
「こんな格好で、おちんちんシゴかれて気分はどう？　聞くまでもなく最高のようね」
確実に快楽の刺激を送り込んでくる咲夜の容赦の無い責めが続けられる中
男はすでに限界を迎えつつあった。
「先っぽをこんなに膨らませて……いいわよ、ほら、射精しちゃいなさい❤
ほらほら、受け止めてあげるからこの手の平の上に……びゅっびゅーって❤」
びゅっ!!　びゅくるっっっっっ!!!
「あはっ❤　射精てる射精てる♪　ん……すっごく…熱い❤」
二度、三度……幾度となく脈動し放出された欲望の滾りが咲夜の掌に溜まっていく。
その間もペニスを握った手の動きは止まらず、さらなる射精を促す刺激を与え続けている。
「……まだ、終わりじゃないわよね？　ふふっ……今日はたっぷりと……搾ってあげるわよ❤」
汚れた指を舐めながら、咲夜は恍惚の表情で男を見下ろし、吐息混じりに囁いた……

パチュリーが大きくのけぞるとほぼ同時に、
我慢しきれなかったペニスから、どろどろと濃い精液が溢れ出す。
あまりに長時間縛られたためか異常なまでに粘度を増したそれは、
柔らかな恥丘に強く押さえつけられた状態では勢い良く飛び出す事もできなかった様だ。

「あ……貴方もイったのね……こんなにブリブリで濃いのを吐き出して……
せっかくだから魔法の研究用に頂こうかしら。ちょっとじっとしてなさい。」

性欲が満足すると同時に、本来の知識欲が戻ってきたのか
パチュリーはそそくさと着衣を整えると、奥の研究室に入っていった。

薄暗い図書館の片隅。
お世辞にも体格が良いとは言えない少女にのしかかられ、男は為す術も無く押さえ込まれていた。
「んぅ……❤　じっとしていなさいって言っているでしょう？
もう……これ、押さえ込んでるのに固く反発してきて……もっと腰を落した方がいいのかしら……んっ❤」
謙首をもたげようと必死に主張するペニスを自らの花唇で上から押さえながら
パチュリーはゆっくりと腰を前後にスライドさせ、緩やかな快楽の刺激に浸っている。
その蜜壺から溢れだした痴液により、男の下腹部はすっかりべとべとになっていた。
「駄目よ、挿入れようとしては。今日の貴方は私の自慰のための道具なんだから」
ぷっくりと膨らんだピンク色の敏感な肉芽を擦りつけながら、小さく息を吐く。
「……ん❤　また……～～～っっ❤❤」
先ほどから何度も軽い絶頂を迎えては、また腰をくねらせる……
極度に敏感な体質の少女には、この程度の軽微な刺激が丁度良い様だ。
「はぁ……❤　んっ❤　このエラのところで擦ると…くぅんっ❤❤」
それでも次第に強い刺激を求めだし、
パチュリーは自らも気づかないうちに徐々に息を荒げていった。
小さな液の飛る間隔が徐々に狭まり、その高さもどんどん増していく……
「はぁっ❤　はぁっ❤　……っ❤❤　ふぁっ❤　これ……いいのっ❤」
激しくうねるパチュリーの腰から伝わる刺激に、男も次第に高まっていく。
一際大きな絶頂が飛ると感じたパチュリーは蜜液が溢れ出る秘芯を夢中で擦り付けた。
「くっ❤飛るッッ❤　凄いの……がっ❤❤　イっ❤　イっひゃッッッ❤❤　～～～～っっっ❤❤❤」

「さっきから射精した時の気持ち良いのが
ずっと続いてるでしょう？
ふふっ❤──これからですよ……
もっともっと気持ち良くしてあげます。
気が狂っちゃうくらいに❤」
男の背中にぴったりと覆い被さり、
耳元で囁く小悪魔。
二人がかりの搾精行為は終わらない。
男の精が尽きるまで……

立ち並ぶ本棚の死角になる場所。そこで時折行われる小悪魔達の情事だが
今回はいつもとは少し状況が違う様だ。

「もうすっかり慣れてしまったみたいですね❤」

本来の体勢とは逆に、小悪魔が後ろから男に覆い被さっている
後ろに生えるその尻尾は股の間を通して前方に回され……男の肛肉を責いていた。
太ももの間に挟んだ尻尾はテラテラと光って滑り、小悪魔の腰の動きに合わせて、男の中へ突き立てられている。

「腰が砕けちゃってますよ、ほら、しっかりして下さいよ❤」

小悪魔の唾液によって濡らされた尻尾で直腸をかき回され
たっぷりと淫魔のエキスを吸収したその身体は、すでに快楽に支配され、力が入らない。

「くすっ❤　まぁ、いいですけれど……私が動いてたっぷりイかせてあげますから❤」

小悪魔は構わず腰を突き入れた。
その尻尾は男の中で蠢き、的確に性感帯を擦り上げる。

「ここ……気持ち良いでしょう？　尻尾だから……中で自由に動かせるんですよ、ほら❤」

そう言って小悪魔は尻尾の先で精嚢を直腸の壁越しに引っかいた。
唐突な射精感に見舞われ、男は大きな嬌声を上げた。

「ん……❤　美味しい❤　まだまだどくどく溢れてきてますよ、おにーさんのせーえき♪」

男の開いた両足の間に潜り込み肉竿を咥え込んでいた、
少し体格の小さい方の小悪魔が淫靡に囁いた。

「今日は全部……飲み干してあげますから❤　んむっ❤」

そう言ってその小さな口の奥まで男のペニスを再び咥え込んだ。

掌で亀頭を包み込んだまま、その細長い指も器用に動かし、竿に、カリ首に、適度な刺激を与えていく……男は夢中で乳房に吸い付きながら、たまらずその身を痙攣させた。

ぶびっ!!　ぶびゅっっ!!!　ぶびゅるっっっ!!!!

勢い良く射出されるはずだった熱い滾りは、出口のところで被せられた掌で遮られ、それでも後から後から押し寄せてくる濁流に押され、無理やり外へと噴出した。握られた掌から溢れ出した白濁液が、まだ脈動を続ける竿を滴り落ちていく。

「くすっ、手の平に……中出ししちゃいましたね♪　でも、飛び散らせちゃうと後片付けが大変ですから」

おっぱいにじゃぶりついたまま、余韻に浸る男を美鈴は優しい瞳で見つめていた……

「こう……ですか？　んっ❤　くすぐったいです」
男に頼まれ、衣服の前をはだけた美鈴は、その大きな乳房に男の口を導いた。
柔らかく相当のボリュームがあるその膨らみに、男の顔はすっかり埋められている。
「えっと……あらあら、もうこんなにして❤」
乳房を支えつつ、もう片方の手で男の下腹部に手を伸ばし
美鈴は器用に男のイチモツを取り出した。
乳首に吸い付き興奮している男のそれは、すでにギンギンに反り返っている。
「ちょっと体勢がキツいですね……よっと」
乳房を押し付けるように男にのしかかる美鈴。男は完全に身を委ねている状態である。
背中側から手を伸ばし、再び男の肉棒を握ると、ゆっくりと手を上下させた。
ちゅぱっ……ちゅぱっ……
にちゃっ……にちゃっ……
乳首に吸い付く小さな音と、先走り汁に塗れた指が欲棒を扱く音がこだまする……
硬く反り返ったカーブに合わせ、美鈴は伸ばした手首を上手く返して刺激を与えていた。
「ふふ……そんなに必死に吸い付かれたら、本当に母乳が出る様になっちゃうかも❤」
目を瞑り乳房に吸い付く男の顔を眺めながら美鈴は笑みを浮かべた。
左手が握るその先からは、とめどなく透明な汁が溢れ、その指を濡らしている。
掌を被せ、その潤滑油を擦り付けながら、亀頭のみに刺激を与える様、手首をくねらせた。
その刺激に男は思わず腰を引くが、ぴったりくっつかれている手は離れず
逆に自身の弱い部分を相手に教えるかの様な動きとなっている。
「パンパンに膨らんじゃってますね♪　そろそろ……ぴゅっぴゅっしちゃいましょうか❤」